

シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」(三)

高 森 昭

目 次

(承 前)

- 四、シュライエルマッハーの哲学的著作における「神学と哲学」
 - (イ) 独白録
 - (ロ) 倫理学および関連諸著作
 - (ハ) 解釈学
 - (ニ) 弁証法
 - (ホ) 其他(とくに書評)

すでに「シュライエルマッハーにおける『神学と哲学』」(一)および(二)において、我々は研究史ならびに神学的諸著作の検討を行ってきた。このたびはシュライエルマッハーの哲学的な諸著作において、「神学と哲学」が如何にとりあげられているかを明らかにしたいと考える。これに関連して、彼のプラトン翻訳および書評も併せ検討する計画で

あったが、今回は果せなかった。なお神学的著作にふかい関係をもつシュライエルマッハーの説教については、これまた今回は割愛せざるを得なかった。かくしてシュライエルマッハーにおける神学と哲学の関連を、その神学および哲学の全著作にわたって検討することを目標とした我々の探究は、ここに一応の終結に到達することとなった。近い将来、三回にわたって継続した敘述を集大成するに際して、これまで触れることの出来なかった幾つかの主題は必ず補充したいと考えている。

四、シュライエルマッハーの哲学的著作における「神学と哲学」

(1) 独白録

シュライエルマッハーは宗教論初版を発表した翌年、一八〇〇年の初めに、独白録 *Monologen* と題する小著を刊行した。⁽¹⁾ 本書は文学的香りをたたえた作品として広く知られており、宗教論とともにシュライエルマッハーの若き時代におけるロマン主義との緊密なる関係を示す点で忘れてはならぬ位置をしめている。たしかに献呈の辞につき、内省、吟味、世界観、展望、青春と老令の五章よりなる独白は、彼がその魂の奥底で自己自身を語りかわした事柄の芸術的な表現であると云えよう。この意味では、かつてデイルタイが独白録を、「彼(シュライエルマッハー)の生の理想を完全に眼前に見るように敘述したもの」と総括したことは正しいと言わねばならない。⁽²⁾

このようにシュライエルマッハーの独白録は、文学的な雰囲気をもって人生観の描写を試みたものである。したがって我々の主題である「神学と哲学」を本書のなかに探究しようとする場合には、必ずしも求めている解答に出会う

ことは期待できぬことが明らかであろう。たしかに独白録のすみずみに至るまで検討をかさねても我々はシュライエルマッハーが神学と哲学、および両者の関連について正面から言及している個所を見出すことは出来ないのである。しかしながら、この事実から我々は直ちに、独白録をシュライエルマッハーにおける神学と哲学の関係を探究する作業から外して差支えないという結論には到達しない。むしろシュライエルマッハーが独白録を書き上げるに至った当時の思想的背景と彼自身の問題意識とのなから、我々の主題にアプローチして行く鍵を見出すことが十分に可能であると考えられる。これらの点にかんして以下に少しく述べて見たいと思う。

独白録においてシュライエルマッハーがその基調にこうとしているのは人間の自由である。自由なる人間は変化する現実の只中であって、自己の永遠なる個性を直観することが出来る。こうした自己の直観は、また自由なる人間の倫理的洞察を可能にするものである。「人間が人間に贈りうるものの中で最も心おきない贈物は、人間が心情の奥底で自分自身に語ったものを描いて他にない。それはあらゆる神祕のうちの最も神祕なものを、自由な本質を洞察するあの広い無礙な眼を人間に与えてくれるからである。また、これ以上に信頼における贈物は他にない」。⁽³⁾

このようにシュライエルマッハーにとっては、個性の自覚にめざめた人間の行為に大きな関心がよせられていた。彼が倫理の問題に深い興味をいだきつつ成長してきた点について、我々に後にあらためて総括的な探究を試みたいと思う。ここではシュライエルマッハーが独白録の一節において、その倫理観を神性 *Gottheit* との関わりで述べていることを指摘するにとどめたい。

「こうして自由はばくにとつて何よりも根源的なもの、第一のもの、最も内なるものである。ばくが内をかえり見て自由を見ると、ばくのまなざしもまた時間の領域から歩み出て、必然の制約から自由となる。隷属の押さえ

つけるような感じはすべてしりぞいて、精神はその創造的本質を自覚し、神性の光がさしこんできて、人々が悲しみ迷いながらその中をさまよっている霧を遠くへはらいのける」⁽⁴⁾

ここでシュライエルマッハーが神性の光がさしこむことを、自己が自由になることに結びつけている点に我々に注目してみたいと考える。彼は神性 *Gottheit* と自由との関わりを如何に把握しているのであろうか。この問題に取りくむときに我々は初めて、シュライエルマッハーが神学と哲学との関連を独白録においてどのように敘述しているかの答えに近づくことになるであろう。

シュライエルマッハーが独白録において、彼の倫理観、人生観をまことに文学的な筆致で敘述していることはすでに述べた。こうしたシュライエルマッハーの思想の背景に我々は何を見出すことが出来るであろうか。これは今日もなおシュライエルマッハー研究者の間において論争され続けている課題であることは興味ぶかいものがある。たとえば Fr・ヘルテルは独白録における哲学的倫理的思惟のなかに神学的な手掛りを見出そうとし、神と人間との一体が人間存在の中に表わされている事柄を指摘せんとしたシュライエルマッハーの意図を強調する。⁽⁵⁾ これに対して W・シュルツは独白録には宗教論とともにギリシヤ的倫理観の要素が見逃されるべきでない点を主張してゆずらないのである。⁽⁶⁾ このような対決はそれ自体では決して無意味とは云えないにしても、少くとも十分に生産的であるとは思われない。むしろシュライエルマッハー自身の問題意識と思想形成に即した形で判断されることが望ましい。この意味で我々はシュライエルマッハーが神性の直観と自由なる個性との密接な関わりを知るのは、その家庭およびニースキー（一七八三―一八五年）、バービー（一七八五―一八七）の学校時代におけるヘルンフト派敬虔主義、とりわけそこのキリスト観にもとづいていることを指摘した最近の研究は注目すべきであると考えられるものである。⁽⁷⁾ たしかに我々はこれま

でシュライエルマッハーの思想形成を同時代の著名な思想家との関わりで考察する経験を重ねてきた。たとえばカント（W・デイルタイ）、シェリンク（H・ジュースキント）、フィヒテ（E・ヒルシュ）の名があげられると共に、ヤコービ、スピノーザへの関心がロマン主義との接触に先立つ時期におけるシュライエルマッハー（とくに一七九〇年代）の背景として考えられてきたのである。しかしながら宗教的素地としてシュライエルマッハーの内的思想形成に与えたヘルンフト派敬虔主義の影響は決して無視し得ぬものである。もちろん我々はシュライエルマッハーが敬虔主義に反発してバービーを去り、ハルレ大学において勉学生活を始めた事実のもつ意味を軽視するものでは決しない。にも拘らず彼があたかも憎みながら愛する者のようにヘルンフト派敬虔主義の地盤のうえに成長していることは、シュライエルマッハーの思想的背景を彼自身に即して判断する場合に逸してはならぬ点であると思われる。⁽⁸⁾ 独白録における神学と哲学の関連を探究する我々の歩みは、かくしてより広大なる視界が開かれるのを予測するところに到達したようである。さきに我々はシュライエルマッハーが独白録を通して、その倫理観、個性の自覚にめざめた人間の行為を敘述していることを指摘した。したがって我々の考察はさらに独白録のみならず、彼の倫理学および関連諸著作に及んで然るべきであろう。シュライエルマッハーが独白録によって示した思索の基礎が、その倫理学関連著作において如何に展開されているかを次節に検討してみたいと思う。

(四) 倫理学および関連諸著作

シュライエルマッハーの倫理学において、神学と哲学の関連が如何に把握されているであろうか。我々はこの主題に取り組むにあたって、先ずシュライエルマッハーがその生涯を通じて倫理の問題にふかい関心を持ち続けたことを

知らねばならない。彼の倫理学および関連諸著作を拾い出すと、膨大な数に達するという事実はそのことを雄弁に物語っている。⁽⁹⁾我々がここでシュライエルマッハーにおいては、いわゆる哲学的倫理学と神学的倫理学の関連がどのようになり立てられているかを考察するならば、必ずや豊かな収穫が期待できることが間違いないと思われる。

シュライエルマッハーの倫理学について、その輪郭と位置づけを総括的に示すことは、当面われわれの意図するところではない。⁽¹⁰⁾むしろそうした倫理学の把握と展開の根底に、シュライエルマッハーが神学と哲学の関連を如何にとらえているかが明らかにされるよう努めたいと思うものである。

シュライエルマッハーにおける哲学的倫理学と神学的倫理学の関係について、我々はすでに研究者の間に大きな見解の相違が存在することを知っている。この主題は正に今日もシュライエルマッハー解釈における争点のひとつと云って良いであろう。たとえばP・H・ヨルゲンセンはシュライエルマッハーの神学的倫理学は哲学的倫理学の付け足しにすぎないと見なしている。⁽¹¹⁾これに対してH・J・ビルクナーは哲学的倫理学と神学的倫理学の両者を、シュライエルマッハーの学問体系全体の中に位置づけることを試み、その異同を明らかにした。⁽¹²⁾それらを通して彼はシュライエルマッハーにおける神学的倫理学の自主性が明確になるよう努めている。同様にH・パイターはシュライエルマッハーの倫理学思想全体のなかで神学の優位が貫かれていることを、義認論の研究に関連させて主張するのである。⁽¹³⁾これらの業績を詳細に検討するときに、我々はH・J・ビルクナーの仕事を最も評価し得ると思われる。それは彼がその探究をシュライエルマッハーの学問体系に関連させて展開し得たことに負うものであろう。それゆえ彼が到達した結論は、シュライエルマッハーにおいて哲学倫理学と神学的ないしはキリスト教倫理学とは競合しあう関係ではないというものである。すなわち前者は抽象的形式的な骨組を提供して普遍的な形式や構造を記述するのに対して、

後者は前者の前提を受けて具体的歴史的な生の形態を敘述するところに独自性を保持するという。⁽¹⁴⁾我々は彼の主張を基本的には説得力あるものと受けとめたい。とりわけ彼がしばしば引用されてきたシュライエルマッハーの *Die christliche Site* の緒論と付録A（一八〇九年講義原稿）およびC（一八二八年講義原稿）のみによって、哲学的倫理学と神学的倫理学の関係を判断することの誤りを指摘したことには、その貢献が認められてよいと思われる。⁽¹⁵⁾したがって我々は彼の到達点から出発して、さらにシュライエルマッハーにおける神学と哲学の関連がその倫理学関連著作で如何に表われているかを考察してみたい。この課題にとりくむことを通して、H・J・ビルクナー自身がおお洞察し得ていない事柄がおのずから明らかになるであろう。⁽¹⁶⁾

さきに我々はシュライエルマッハーの倫理学の輪郭を述べることは割愛すると云った。しかしながら茲で主題の内容を鮮明に描き出すためには、少くとも最少限の言及はなされるべきであろうと考える。したがってシュライエルマッハーの哲学的倫理学および神学的倫理学の大綱を图示することを行ってみたい。我々の意図するところは云うまでもなく、両者の密接な関連がそれを通して明瞭に見出されることである。この様にしてシュライエルマッハーにおける神学と哲学の関連を把握するのが我々の目的である。それゆえ文章による概要の説明は成し得る限り縮少せざるを得なかったことを御了承いただきたい。

人間は最高善をめざして理性的存在として自然に対して働きかける。この行為の過程が倫理であり、この意味で倫理学は文化過程を扱う文化哲学となる。⁽¹⁷⁾その際に一方で象徴化的（理論的には自然を理性の象徴たらしめる）——有機的（現実には自然を道具として自己を形成する）の区別が、他方で個別性（個性的に特長づけられる性格）——一般性（共同体との同一性に立つ性格）の区別が存在する。これらを交錯させて四つの場合を考え得る。さらにそれ

それについて異なる形態、関係、制度があり得るのであり、シュライエルマッハーはそれらに関する構想をのべている。このようにして各種の要素は文化過程の一環として位置づけられ、それぞれの領域を近代社会のなかに受持つこととなるのである。理解を容易にするために茲にそれらを図で示すことにしたいと思う。

	最高善			
	個別的象徴化的行為	一般的象徴化的行為	個別的有機化的行為	一般的有機化的行為
(行為と性格)	宗教的感情	言語および知識	所有	相互交流
(形態)	啓示	信頼	社交	法
(関係)	教会	学者の共和国(大学)	自由団体	家庭および国家
(制度)	宗教	学問	経済	法律
(領域)				

シュライエルマッハーはキリスト教倫理学を以下のように構想している。キリスト教的行為は敘述する面と活動する面とに大別される。両者が教会内および教会外すなわち社会的側面に分けて考察されることになり、また活動する面についてはさらに補導的な行為と普及的行為とに細分されている。それらの内容を理解に便ならしめるために、我々は茲でも図で示すことを試みたいと思う。それを通してシュライエルマッハーがキリスト教倫理学を展開するにあたって、教会と社会を対立する関係としてはとらえておらず、むしろ社会のなかにおいて働く教会として把握してい

る点が明瞭になってくるであろう。さきに我々はシュライエルマッハーがその哲学的倫理学において、教会を他の文化過程と並ぶ最高善実現の一環と見なしていることを知った。その神学的倫理学においても彼はさらにそれらの具體的歴史的形態における展開を述べているのである。

キリスト教的行為				敘述面	
活動面				内	外
補導内		普及的			
内	外	内	外	礼拝・礼典	言語・習慣
教会戒規	家・家庭	結婚・子女教育	布教		
教会改革	教会政治 教会と国家	教育施設としての 学校および教会	文化政策	職業生活の徳目	社交団体
				(内に向う行為)	
				(外に向う行為)	

さて二度にわたる図示を通して、我々のまえにシュライエルマッハーの哲学的および神学的倫理学が骨格を示すに
シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」(三)(高森)

いたった。そしてシュライエルマッハーの倫理学において、神学と哲学が如何に関連づけられているかが次第に明らかになってきたのである。さきに描かれた図を見る限り、哲学的倫理学と神学的倫理学を結びつける場所が、教会に外ならないことは誰の目にも明瞭である。換言すれば、教会は近代社会において、学校、自由団体、家庭および国家とならぶ文化過程の一環として存在している。また同時に教会は人間の倫理的行為のよってきたところ、すなわち「何故」あるいは「何のために」を反省する場所としての機能を果すことになるのである。この意味でシュライエルマッハーは哲学のおよび神学的倫理学の結び目に教会を位置づけているのである。

この点に関連して我々は最近のシュライエルマッハー研究において、彼の洞察をキリスト教社会倫理への貢献として再評価する主張が強くなされるに至ったことに注目してみたいと思う⁽¹⁸⁾。そこでは従来の研究においてシュライエルマッハーのキリスト教社会倫理学が軽視される傾向があったことに対して、むしろ彼の教会を軸とする哲学のおよび神学的倫理学の展開は、彼が一九世紀初めに生きた思想家として抱いた近代市民社会の構想として、欠くべからざる今日の意義をもつことが主張されている。我々はこうした最近の研究成果をそれなりに評価できるものと考ええる。しかしながら、それでこれまで見落されていた全ての事柄が明らかになった訳ではない。現在なお明確になっていない点や、未だに確信をもった立証がなされずにいる事柄は少からず存在しているのである。そのなかで我々が自らの探究によって到達し得た結果の幾つかを紙数のゆるす限り以下に示しておきたいと考える。それによってシュライエルマッハー研究の一端にふれ得ると共に、我々の主題である神学と哲学との関連をシュライエルマッハーの倫理学関連著作のなかを探る手助けとなり得るものと確信するからである。

当面の課題はシュライエルマッハーの念頭に近代市民社会の構想が成熟して行く経過を明らかにすることである。

これについて我々は、シュライエルマッハーが近代市民社会の構想をそれまでのやや断片的なものからまとまりのある姿に形成して行くきっかけが、一八〇六年プロイセンの敗戦から一八一〇年ベルリン大学開設に至る動乱の状況にあることを指摘したい。このことはとりわけシュライエルマッハーの倫理学講義原稿に示される。すなわち彼の倫理学が体系的まとまりを見せ始めるのは、ハルレ大学からベルリン大学に移った後のことであり、初期の著作のうちには見出しがたい。具体的には一八一二年から一三三年にかけての講義でそれが表われ始め、さらに一八一六年の講義において略まとまった形がととのっているのを見出すのである⁽¹⁹⁾。したがってシュライエルマッハーがベルリン大学教授として、当時のプロイセン王国が指向していた「上からの近代化」の只中で、近代市民社会の構想を彼自身がきびしく問われるなかにあつて、その倫理学が形成されて行くことを見るのである（ちなみに彼自身はシュタインやハルデンベルクの近代化政策に賛成であった）。

第二に我々はこの様な近代市民社会の構想をシュライエルマッハーがいだくに際して、彼に刺戟を与えたものは何であったと考えられるかの問題にふれてみたい。すでに今世紀二〇年代のシュライエルマッハー研究は、この点に関してイギリスのA・スミスからの影響を指摘している⁽²¹⁾。たしかにA・スミスがその国富論（一七七六年）や道徳情操論（一七五九年）において、個人の関心や利益が経済のプロセスを通じて、「見えざる手」に導かれるように公共の福祉へといったり、分業と労働の交換により社会化がなされる構図を展開している。ここからシュライエルマッハーが近代市民社会の構想を刺戟として受けとり、彼自身はそれを文化過程としての倫理学をもって体系化し構成することを意図したのである。我々はこうした推定が確実度の高いものと考えている。何故なら当時のドイツにおいて、とりわけカントからヘーゲルに及ぶドイツ観念論の思想家にも、A・スミスの影響は継続して見られるからであり、シュ

ライエルマッハーの場合にもそれは充分に有り得ることだからである。しかしながら何時、何処で彼がA・スミスの市民社会論から刺戟を受けるに至ったかの確証は、これまでの研究は今日までついに明らかにし得なかった。これについて我々は茲に確信をもって次の事実を報告したいと思う。それはシュライエルマッハーの蔵書目録が一八三五年にまとめられた際に、その中に彼が一八二二年版のスミス著作集および国富論（いずれも英文）を所有し使用したことが確認できるのである。⁽²²⁾一八二二年はさきに指摘した如く、シュライエルマッハーの倫理学講義がベルリン大学で行われ、彼の構想が大きくまとまりを示し始める時期に合致している。かくしてこれらの事實はシュライエルマッハーが抱く近代市民社会の構想に刺戟を与えたA・スミスの存在を裏づける有力な手がかりとなることは間違いないと思われる。

第三にシュライエルマッハーがA・スミスから影響を受けたとしても、さきに図示した内容の倫理学はあくまでも彼自身のものであることにふれねばならぬ。とりわけA・スミスが一八世紀イギリスの思想家として宗教問題に示した理論的傾向は、シュライエルマッハーには見られぬことは云うまでもない。これと共にシュライエルマッハーがA・スミスから近代市民社会の構想を受け取って文化過程としての倫理学に体系化することを意図したとしても、それはあくまでも当時のドイツにおいて構想としてとどまらざるを得なかった点に触れておかねばならない。換言すれば彼の構想は、実現される可能性にとばしいものに留らざるを得ないという、近代のドイツの宿命を負う外はなかったのである。イギリスにおいて近代社会のない手となる市民階層が政治的経済的に力を保持していた条件が、シュライエルマッハー時代のドイツにおいて欠如していたことを考えれば、彼自身の意図したところは壮大であるとしても、その倫理学がなお越え得ない時代の制約のなかに立つ事實は我々として見逃すわけには行かないと思われる。⁽²³⁾

(イ) 解釈学

シュライエルマッハーが解釈学の歴史において輝かしい足跡を残していることは云うまでもない。しかしながら我々は茲でシュライエルマッハーの解釈学に関して全般的に取り上げることが出来ない。我々の探究する神学と哲学の関連が、シュライエルマッハーの解釈学において如何なる姿を示しているかを明らかにする課題に限定することにし⁽²⁴⁾たい。

シュライエルマッハーが解釈学に並々ならぬ関心をいだきながら、彼自身が書き記したものとしては、僅かに晩年の一八二九年にベルリン・アカデミーにおいて行われた二つの講演のみが知られている。そしてこの事実がシュライエルマッハーの解釈学研究に一つの困難をもたらしたことは否定できないのである。この点で一九五九年にH・キムメルレによるシュライエルマッハーの原稿にさかのぼって編集された校訂本の刊行は、研究の前進に大きく貢献しているのである。⁽²⁵⁾しかしながらH・キムメルレはさらに一九七四年に至って第二版校訂本を発表している。⁽²⁶⁾その結果、シュライエルマッハーが解釈学の講義を行った回数はこれまで確認された七回に加えて、さらに一八〇九／一〇年、一八一〇／一一年の二回が存在すると訂正されることになったのである。⁽²⁷⁾すなわちシュライエルマッハーがその大学教授としての生涯のなかで合計九回に及ぶ解釈学講義を行っていたことを、我々は十分に記憶すべきであると考ええるものである。さらに晩年に行ったベルリン・アカデミーでの講演を考え合わせるならば、これらの事實はシュライエルマッハーの解釈学によせる情熱のほどを物語っていると云えるであらう。

さてシュライエルマッハーの解釈学のなかには、直接に神学と哲学の関連について言及している箇所は見当たらない。

このことはさして驚くに値することではないと云える。何故ならシュライエルマッハーは、アストやヴォルフの解釈学に関連しながら、単に文献学における作業としてではなく理解すること自体を研究する解釈学を意図したことを更めて銘記する必要がある。したがって彼はこの様な構想のもとに普編的解釈学の建設を目標としているのである。⁽²⁸⁾このことに留意するならば、シュライエルマッハーが解釈することの基礎を解明している論述のなかに、神学と哲学との関連についての言及が直接に見出されない方がむしろ自然であることに気づくであろう。むしろ我々が課題としていた事柄は、シュライエルマッハーが新約聖書の神学的解釈学を論じている場合により明らかに示されると思われる。したがって我々はなおしばらくの間、シュライエルマッハーが新約聖書解釈学に関して如何なる主張をなしているかに注目して見たい。

シュライエルマッハー自身が回想しているところによると、彼が解釈学の理論的探究に取り組む動機を準備したのは、ハルレ大学において新約釈義の講義を始めた時にさかのぼるといふ。⁽²⁹⁾ここで我々はシュライエルマッハーの初期から晩年に及ぶ各種の解釈学に関する敘述のなから、一八二九年にベルリン・アカデミーにおいて行った講演の二節を取り出すことを最も妥当なる方法であると判断するものである。それはシュライエルマッハーが若き日に新約解釈学の課題に直面したのち、その理論的探究に取り組んだ姿勢が晩年に至るまで変りなく貫かれていたことを示すからである。

シュライエルマッハーは特殊解釈学としての新約解釈学の位置づけを、古典古代の文献学的研究との関連で行っている。彼と同時代に提唱されていたヴォルフおよびアストの解釈学に言及しつつ、シュライエルマッハーは自己の見解を披瀝している。⁽³⁰⁾すなわち古典古代の研究のあり方と類似しつつ、しかも独特な、新約聖書に基礎をおく聖書解釈

学が必然的に位置づけられることを主張する。

「……多くの他に準備された研究と連携しつつ、キリスト教神学の類似した機構が形成されるべきである。それ（解釈学）がキリスト教神学にとって何物であり、かつまた古典古代にとって何物かであるならば、その本質をなすのは一方のものでも他方のものでもないであろう。こちらがこちらよりも多少とも大きいということは単に溢れ出てそうなたたに過ぎないのである」⁽³¹⁾

ここで我々はシュライエルマッハーがみずから神学通論（一八一一年初版、一八三〇年第二版）の中で、新約解釈学に関して指摘し主張していることを想起する必要がある。彼はそこでは釈義的神学の基本的な機構として、高層および下層批評、原語の知識および歴史的資料を利用できる能力をあげている。⁽³²⁾これらはシュライエルマッハーが古典古代学と共通の基盤のうえに新約解釈学の位置づけを論じているところと符合している。我々はシュライエルマッハーが解釈学を決して個々の考察の集合として取り扱わない立場を貫いたことを知っている。その限りにおいて新約解釈学もまた古典文献解釈学と同じく、哲学との緊密なる関連のもとにある普編的解釈学の法則を精密を規定することを通して可能となる。したがってこの様な関連のもとに新約解釈学の性格づけを試みるシュライエルマッハーの取り組みは、解釈学を通して神学と哲学との関連を我々に示す適切な事例であると云えよう。

(二) 弁証法

シュライエルマッハーの弁証法 *Dialektik* において、我々は神学と哲学の関連を明らかにする探究に際しての、困難な課題のひとつに直面する思いをいだくのである。それはシュライエルマッハーの神学的著作において、神学通

論や信仰論が占めている位置とほぼ相通するものを、その哲学的著作のなかでは弁証法が保持していることによる。もちろん彼の哲学的諸著作は、本論文で取り上げてきたように決してその弁証法のみが代表できる性質のものではない。にも拘らず我々の主題である神学と哲学の関連を明らかにする視点から見れば、弁証法がシュライエルマッハーの哲学的著作における中心的位置を占めることになるのは、むしろ当然であるように思われる。ここでは哲学的な思考の法則や知識の構造が論議されているからである⁽³³⁾。

しかしながら我々がこんにちシュライエルマッハーの弁証法における思想内容を検討するにあたって、何人も直面することを避けられぬ問題が存する。それは端的に云ってシュライエルマッハーの弁証法という著作には種々の敘述が存在している事実に由来するのである。すなわち一八一一年のメモに始まり、シュライエルマッハーの講義要旨、ノート筆記、メモ類として保存されているもの日付は、一八一四年、一八年、二二年、二八年、三一年の多種にわたっている。この外にシュライエルマッハーは晩年に弁証法の緒論を書き出版に備えていた。したがってこれら草稿類をもとにシュライエルマッハーの弁証論を研究する仕事は、先ずこれらのうちどれが最も内容的に重要であるかの決定をめぐって争わねばならぬことになる。事実こんにちに至るまで種々の意見が分れた結果、それはシュライエルマッハー研究における未解決の争点となっているのである。

いま主なる主張に言及すると、シュライエルマッハーの死後に弁証法の最初の校訂本を出版したL・ヨナスは一八一四年の講義筆記ノートを重要視している⁽³⁴⁾。これに対して異論はすでに当時から提出されていたが、やがてW・ディルタイは一八三一年の最終講義に示される内容を高く評価する立場を表明するに至る。この見解に従っているのが一九〇三年に刊行されたJ・ハルペルンによる校訂本である⁽³⁵⁾。しかしながらG・ヴェールンクはこれらの見解に満足せ

ず、シュライエルマッハーと同時代の哲学思想との関連を探究しつつ、同時に弁証法の草稿相互間の差異を再検討した。その結果、シュライエルマッハー自身の思想形成が一八一一年から一四四年にかけて明瞭にのみよみとられることを確認したのである⁽³⁶⁾。つづいてR・オーデブレヒトは一九四二年に弁証法の新しい校訂本を出版したが、その際にヴェールンクの見解を採用して、一八二二年版の草稿をもとに編集を行っている⁽³⁷⁾。このようなシュライエルマッハー研究者における見解の相異は、それ自体けっして珍しいこととは云えないかも知れない。しかしながらこの問題が弁証法におけるシュライエルマッハーの思想を探究する課題に少なからぬ困難を提供してきたことは否定できない。すくなくとも研究者の間にさえ、必ずしもすんなりと議論がしにくい雰囲気をつくってきたことは確かである。この点で更めてこんにちシュライエルマッハーの弁証法に関する各種の草稿を、一八一一年に始まり一八三一年の最終的形態に至るまで厳密に対照し得る異同一覧の整備が求められている。それによって我々はシュライエルマッハーの哲学的思考が展開して行く経過を確認し得るからである。

さて茲で我々はシュライエルマッハーが弁証法という概念において如何なる事柄を理解しているかに注目してみたいと思う。シュライエルマッハーにおける弁証法とは、プラトンにならった対話を遂行する学芸(Kunst, ein Gespräch zu führen)なのである⁽³⁸⁾。この理解はシュライエルマッハーの場合には、すでに初期の原稿にあらわれていることが確認される。さらに一八一八年の講義には次の言及がなされている。すなわち、

「弁証法とは、思考における或る相異を一致へともたらず学芸である」⁽³⁹⁾。

一八二二年以後の講義においてはシュライエルマッハーは常にこの定義から出発しているのである⁽⁴⁰⁾。我々はここでシュライエルマッハーが同時代の哲学者ヘーゲルのように、弁証法を思考の運動や発展の法則としては理解していない

ことに注意する必要がある。むしろシュライエルマッハーにおいてはプラトンが明らかにしたような意味での、事柄の本質をとらえ概念的に把握するための思考の技術として弁証法を理解しているのである。そこから哲学することの諸原理や知識の全体的構造をさぐり明らかにしようとしたのが、弁証法においてシュライエルマッハーの意図したところと考えられる。

さて弁証法をシュライエルマッハーが敘述してゆくにあたり、彼はその内容を二部に分けている。すなわち、「先験的部分」と名付けられるものと、「技術的あるいは形式的部分」と呼ばれるものである⁽⁴¹⁾。前者においては認識の形而上学を根拠づける論議がまとめられ、知識の理念それ自体を考察している。これに対して後者においては前者を具体化する方法が論ぜられ、知識の生成と思考の進展を考察する内容になっている。このような構成からなる弁証法においてシュライエルマッハーは何を訴えようとしているのであろうか。我々は神学と哲学との関連をさぐる探究の主題を意識しつつ、いまこの点への考察を進めるべき地点に到達したと思われる。云うまでもなく、シュライエルマッハーの活動した時代は、カント、フイヒテ、シェリング、ヘーゲルなどのドイツ観念論の潮流にぞくする思想家のそれと時を同じくしている。したがってこれらの哲学史にのこる人々の思想活動と、シュライエルマッハーが無関係であり得る筈はないのである。それならばそうした強力な幾人かの立場と接触しながら、シュライエルマッハーは如何なる点に彼自身の独自の洞察を確立したと云えるであろうか。神学と哲学との関連を考察する我々としては、この点に関して依然として変ることのない関心をいだかざるを得ないのである。

これに関連してここで我々はシュライエルマッハーが、弁証法と解釈学を対比して関連させつつ考察する視点を示している事実をあげたいと思う。それは一八一四年の講義に始めて表われ、一八年の講義において敷衍されるものである。すなわち

「……解釈および翻訳の技術は言葉のなかへと解消させることである。弁証法は思考を言葉のなかへと同じく解消させることであり、その際に完全なる意志の疎通が存在するものである。またその場合に常に最高の完全さ、知識の理念が留意されている。そのことから両者（解釈学と弁証法）はつねに相互に関連し合うのである」⁽⁴²⁾

ここではシュライエルマッハーは弁証法を解釈学と対比させて定義することを試みている。その際に我々は彼が弁証法を、思考を言葉のなかへと解消させることと説明しているのに注目する必要がある。思考と言葉との間に存在する密接な関係を洞察しつつ、前者が後者によって存在するとともに後者もまた前者によって存在する関係に着目している。そこから弁証法は思考することが言葉を媒介しつつ展開するさまを敘述する課題をになう点が明らかになる。このように弁証法の性格づけに際して言葉の問題に触れてくることは、解釈学に関心の深いシュライエルマッハーの特色が最も鮮明に出ていると云わなければならない。

ここで我々はシュライエルマッハーが弁証法においてその哲学的洞察を示しつつ、彼がその独自の立場を同時代の哲学者による論議のなかで發揮し得たものと判断できる今ひとつの点にふれてみたい。シュライエルマッハーの弁証法は、ひとくちで云うならば、形而上学的思弁的神認識に対する批判的検討であると言えよう。云いかえると彼は思弁的な神についての知識に問いを投げかけるのである。この意味で我々は神学と哲学の関連を検討するにあたり、弁証法がシュライエルマッハーの哲学的著作における重要課題たり得る理由があると見なすのである。もちろん我々はシュライエルマッハーに先立って一八世紀にカントが遂行した神認識のコペルニクス的転換を無視するものではない。しかしながらカントの認識批判と比較するときに、我々はシュライエルマッハーが知識および意志の超越的根拠を体

験する場所として、人間の直接的自己意識に訴えていることに注目せねばならなくなる。しかもそれが弁証法においては宗教的感情と結びつけられて論じられている。⁹⁴ここに直接的自己意識と宗教的感情との関わりが無視できぬものとなる。しかも後者についてはシュライエルマッハーが信仰論において絶対依存感情として登場させる概念を背景にもつことが明らかなのである。シュライエルマッハーがこのように直接的自己意識を宗教的感情と密接に関連させて論述を進めるに際し、直接的自己意識を「普遍的依存感情」として規定することを初めて行ったのを、我々は一八二二年の講義において確認することが可能である。⁹⁵ここで我々としてはシュライエルマッハーがその信仰論初版を公けにしたのが一八二一年であったことを想起してみる必要がある。信仰論初版の直後に弁証法においても、それと符号する見解が表われてくるのは興味ぶかいものがある。⁹⁶

宗教的感情の問題が言及されたことに関連して、ここで我々はシュライエルマッハーの弁証法について総括的かつ批判的なまとめをなすべき段階に立ち至ったと信ずる。我々はすでにシュライエルマッハーが弁証法に見る限り、その哲学的思考において決して最終的なまとまりに到達していないことを確認してきた。その事実が今日まで弁証法の研究に際して最も困難な課題となっていると共に、近代哲学の諸潮流のなかでシュライエルマッハーに言及されることがあまり多くない原因となっているのである。たしかに一九世紀から二〇世紀の哲学思想においてシュライエルマッハーがさまざまな論議の対象になっているのは公平に云って比較にならない。したがってシュライエルマッハー研究者にとって、同時代の思想家たちからの影響を考察することが古くから行われて今日に及んでいる。⁹⁷我々は長年にわたって蓄積されたこれらの業績を尊重したいと思う。しかしながら我々としては、シュライエルマッハーの弁証法はそれ自体で単独に検討され批判されるべきではなく、むしろその信仰論や神学通論と関連させつつ考察されるの

が、最も適切な行き方であると確信するものである。事柄をいっそう明確にさせるためには、シュライエルマッハーの哲学思想がその哲学的著作へ働きを及ぼしている面から考察してみることが、今日より豊かな実りを期待し得ると思われるのである。さきに宗教的感情を引き合いに出してみたのも、この結果を導き出すためのささやかな試みであった。

西欧精神史をつらぬいて神学と哲学との関連はつねに神論の問題をめぐって展開されてきた。⁹⁸神学は哲学的言語の地平において論述を展開し、哲学は神学における神論の問題との関わりにおいて折衝しあうことを課題としたのである。神学と哲学の関連が両者の思考の出会いとしてとらえられる限り、それが完結することはあり得ない性質のものであろう。シュライエルマッハーの場合にもそれが当てはまることを我々もここで更めて覚えさせられると共に、彼の哲学的思考が最終的な結論に到達しなかったところにその宿命とも云うべき何物かを実感せざるを得ないものである。

(内) 其他 (とくに書評)

最後に我々はシュライエルマッハーにおける其他の哲学的著作、とりわけ幾つかの書評を中心に考察してみたいと思う。ただ我々は我々の主題である神学と哲学の関連にとって、とくに重要と思われるものに限定し、簡単に述べることで満足せねばならない。

初めにシュライエルマッハーがファイヒテの著作に対して行った書評をあげるべきであろう。シュライエルマッハーはファイヒテの三著作「Das System der Sittenlehre (一七九八年)」、「Die Bestimmung des Menschen (一八〇〇

年) 'Die Grundzüge des gegenwärtigen Zeitalters (一八〇六年) について書評を行っている。⁽⁸⁸⁾ これらの書評を通してシュライエルマッハーはフイヒテに対して、一口で云えば考えることと生きることとを分離している点について批判をしている。シュライエルマッハーにとっては、むしろ考えることが生きることの中に基礎づけられていたからである。⁽⁸⁹⁾

次に我々はシュライエルマッハーがヤコービ F. H. Jacobi (一七四三年—一八一九年) との間にかわした書簡(一八一八年) を指摘しておく必要がある。⁽⁹¹⁾ ヤコービが感情哲学の立場にたちシュライエルマッハーと同時代に活動したことは周知の通りである。このヤコービが感情においてはキリスト者、悟性においては異教徒たることを主張するのに対して、シュライエルマッハーが書簡を送っている。彼はヤコービとの間に争点となっている神学と哲学の関連を、みずからの楕円における二つの焦点と形容している。⁽⁹²⁾ あわせてシュライエルマッハーにとって、「私の哲学と教義学とは互いに矛盾すると心に決めることはない。しかしその故にこそ、両者はそれぞれにもうこれで良いということがないのである」と確信をもって主張しているのである。⁽⁹³⁾

我々はフイヒテの著作への書評およびヤコービへの書簡に限定して簡単な説明をなしてきたにすぎない。しかしながら、これらはすでに他の節において述べられてきたことに加えて、シュライエルマッハーにおける神学と哲学の関連をさぐる適切なる材料となり得ることは確かであろう。

註

- 1 Fr. Schleiermacher, *Monologen. Eine Neuausgabe*, Berlin, 1800. なお第二版は一八一〇年、第三版は一八二二年、第四版は一八二九年にそれぞれ刊行された。なお引用は Friedrich Schleiermacher, *Monologen nebst den Vorarbeiten, Kritische Ausgabe* hrg. von Fr. M. Schiele & erweitert und durchgesehen von H. Mulert (PhB 84), Hamburg, 1978, 246-250.
- 2 W. Dilthey, *Leben Schleiermachers*, 1. Band, *Auf Grund des Textes der 1. Auflage von 1870 und Zusätze aus dem Nachlaß* hrg. von M. Redeker, 1. Halbband, Göttingen, 1970, S. 459—479 参照。
- 3 シュライエルマッハー、独白録、木場訳、岩波文庫、一九五二年、第三刷、九頁より引用。なお訳文の現代かなづかしへの変更は筆者による。
- 4 シュライエルマッハー、独り思ひ、秋山訳、角川文庫、一九〇九年、第一版、二二頁より引用。なお Schleiermacher, *Monologen* 前掲書 S. 17 参照。
- 5 Fr. Hertel, *Das theologische Denken Schleiermachers, untersucht an der ersten Auflage seiner Reden «Über die Religion»* Zürich, 1965, S. 199—205, 206-203f. 参照。
- 6 シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」(高森) 参照。
- 7 W. Schultz, *Das griechische Ethos im Schleiermachers Reden und Monologen*, NZSysth 10 (1968), S. 261—288 参照。
- 8 E. H. U. Quapp, *Christus im Leben Schleiermachers. Vom Herrnhuter zum Spinozisten*, Göttingen, 1972, 20-21. Buch: Schleiermachers Werden durch Christus 1778—1787, Vom Herrnhuter zum Aufklärer. S. 20—102 を参照せよ。またこの点についてはシュライエルマッハーが一七九四年に記した自叙伝 Selbstautobiographie が参考になる。その原文は Aus Schleiermachers Leben im Briefen, 1. Band, Berlin, (1860), 1974, S. 3—15. 20 の項と関連して M. Redeker, Friedrich Schleiermacher, *Leben und Werk* (1768 bis 1834), Berlin, 1968, S. 82 において、シュライエルマッハーが友人プリンクマンに書いた書簡の一節 (Aus Schleiermachers Leben in Briefen, 4. Band, Berlin, (1863), 1974, S. 61) が典拠としてあげられている。ただしこの箇所はレデカーが主張するような個性の自己直観を敬虔主義のなかで学んできた旨をシュライエルマッハーが述べていると解釈する誤に行かぬこと、この機会に私見として明らかにしておく。
- 9 シュライエルマッハーの倫理学関係の著作には次のものがあげられる。まず一七九一年及び一七九三年に及ぶ時期 シュロロ

ントンを説いた時代の作品と推定される。Über das höchste Gut, Über die Freiheit, Über den Wert des Lebens の三論文がある(なお最後のものが注に記された Monologen. S. 166—198 の収録されたもの)。ちなみに一七九四年から九六年にかけての時期と推定されるントラニエルトマンの原稿 Spinozismus がある(この原文は E. H. U. Quapp, Christus im Leben Schleiermachers 前掲書 S. 327—375 の収録されたもの)。この二冊 Monologen 初版や再版の一八〇〇年の前後には Versuch einer Theorie des geselligen Betragens (一七九九年(Schleiermachers Werke, Auswahl in vier Bänden [Auswahl-Vorwort]) hrg. von O. Braun, Bd. 2, Aalen, 1967², S. 1—31 を参照された)や 246 の Vertraute Brief über Friedrich Schlegels Lucinde (一八〇〇年(Friedrich Schleiermacher, Kleine Schriften und Predigten, Bd. I, Berlin, 1970, S. 77—156 の収録)がある)。

ントラニエルトマンが倫理学の空間を体系化を目的として執筆されたものの Grundlinien einer Kritik der bisherigen Sittenlehre (一八〇三年(Auswahl, Bd. 1, S. 1—346 参照)以来のこの書である。彼が意図した倫理学の展開の論議やその後に行われた Entwurf eines Systems der Sittenlehre, Sämtliche Werke, III. Abteilung, Bd.

5, hrg. von A. Schweizer, Berlin, 1895) と共にこの書に属する。この二冊はまたこの二冊の初稿(Auswahl Bd. 2 のントラニエルトマンの草稿から新たに O. von Lamszus の編集された収録されたもの(S. 1—676)に属する)が最善と推定される。ちなみにこの二冊は上記の Versuch einer Theorie des geselligen Betragens の二冊より 1804/05 Tugendlehre, 1805/06 Brouillon zur Ethik, 1812/13 (Einleitung und Güterlehre), (Tugend und Pflichtlehre), 1814/16(Einleitung und Güterlehre D), (Pflichtlehre), 1816 (Allgemeine Einleitung), (Einleitung und Güterlehre I) などの講義原稿の母本(1832Et hik)に由来した A・ントラニエルトマンの母本と推定される。この母本はントラニエルトマンの場合にはケルン・アカデミーにおける講演を無視せよなる。この二冊は Auswahl Bd. 1, S. 347—531 などのこの講義を収録されたものも参照された。1819 Über die wissenschaftliche Behandlung des Tugendbegriffes; 1824 Versuch über die wissenschaftliche Behandlung des Pflichtbegriffs; 1825 Über den Unterschied zwischen Naturgesetz und Sittengesetz; 1826 Über den Begriff des Erlaubten; 1827 Über den Begriff des höchsten Gutes I; 1830 Über den Begriff des höchsten

Gutes II; 1814 Über den Beruf des States zum Erziehung; 1826 Über den Begriff des großen Mannes の機会にントラニエルトマンのキリスト教倫理とよく比較可能なもの。彼はキリスト教倫理と対峙するものとして合計十二回の講義を行なった。その内容は死後に刊行された Die christliche Sitte nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt, Sämtliche Werke, I. Abteilung, Bb. 12, hrg. von L. Jonas, Berlin, 1843, 1884² に見出される。なお最近のントラニエルトマンの講義原稿から編集された Das christliche Leben nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt von Friedrich Schleiermacher, hrg. von H. Peiter, Berlin, 1969 には目すべき収録がある。これらの敘述と共にントラニエルトマンは数多くの説教を通じて、彼自身のキリスト教倫理学を明らかにしようとしたものも推定される。これらについては Predigten über den christlichen Hausstand, 1820, 1826² (Auswahl, Bd. 3, S. 181—400² の収録)を参照された。10 これらについては佐藤敏夫、キリスト教と近代文化、近代プロテスタント思想史、新教出版社、一九六四年、六五—七十七頁の書かれた敘述があり参考となる。

ントラニエルトマンに於ける「神学と哲学」(四(高森)

- 11 P. H. Jørgensen, Die Ethik Schleiermachers, München, 1959 (ケルン語 1953)。
- 12 H.-J. Birkner, Schleiermachers christliche Sittenlehre im Zusammenhang seines philosophisch-theologischen Sittenlehre, Berlin, 1964.
- 13 H. Peiter, Theologische Ideologiekritik. Die Praktischen Konsequenzen der Rechtfertigungslehre bei Schleiermacher, Göttingen, 1977 及び Sittlichkeit bei Schleiermacher, ZThK 72 (1975), S. 398—426 を併せて参照された。
- 14 H.-J. Birkner 前掲書 S. 87 参照。
- 15 H.-J. Birkner 前掲書 S. 81—83 参照。
- 16 及び H.-J. Birkner, Theologie und Philosophie, Einführung in Probleme der Schleiermacher-Interpretation, München, 1974 などについては、ントラニエルトマンの宗教論、神学通論、信仰論の検討が行われたが、倫理学関連著作については殆ど言及がなされずに終った。
- 17 M. Redeker, Friedrich Schleiermacher 前掲書 S. 230—253 を参照された。
- 18 たつて S. Keil, Die christliche Sittenlehre Friedrich Schleiermachers, NZSysth 10 (1968), S. 310—342 及び Zum Neuanfang der theologischen Ethik bei Friedrich

- Sämtliche Werke, I. Abteilung, Bd. 12, Berlin, 1835
 III. Abteilung, Bd. 1, Berlin, 1846
 Bd. 4/2, Berlin, 1839
 Bd. 5, Berlin 1835.
- Schleiermachers Werke. Auswahl in vier Bänden, hrg. von O. Braun und J. Bauer, (1910—13), Aalen, 1967².
 Kleine Schriften und Predigten, 3 Bde., Berlin, 1969—70.
 Aus Schleiermachers Leben in Briefen, 4 Bde., Berlin 1860—63 (=1974).
 木場凱、独白録、聖教文庫、東京、1974。
 木場凱、独白録、聖教文庫、東京、1974。 独白録、独白文庫。
- Monologen nebst den Vorarbeiten, Kritische Ausgabe hrg. von Fr. M. Schiele & erweitert und durchgesehen von H. Mulert, Hamburg, 1973⁴.
 Das christliche Leben nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt von Friedrich Schleiermacher, hrg. von H. Peiter, Berlin, 1969.
 Hermeneutik. Nach den Handschriften neu herausgegeben und eingeleitet von H. Kimmerte, Heidelberg, (1959), 1974².
- Aalen, 1972.
- J. Wach, Das Verstehen. Grundzüge einer Geschichte der hermeneutischen Theorie im 19. Jahrhundert, (1926—33), Hildesheim, 1966.
 W. Schultz, Die Grundlage der Hermeneutik Schleiermachers, ihre Auswirkungen und ihre Grenzen, ZThK 50 (1953), S. 158—184; Die unendliche Bewegung in der Hermeneutik Schleiermachers und ihre Auswirkung auf die hermeneutischen Situation der Gegenwart, ZThK 65 (1968), S. 23—52; Das griechische Ethos im Schleiermachers Reden und Monologen, NZSysth 10 (1968), S. 261—288.
 P. H. Jørgensen, Die Ethik Schleiermachers, München, 1959.
 H.-J. Birkenr, Schleiermachers christliche Sittenlehre im Zusammenhang seines philosophisch-theologischen Systems, Berlin, 1964.
 Fr. Hertel, Das theologische Denken Schleiermachers untersucht an der ersten Auflage seiner Reden "Über die Religion," Zürich, 1965.
 M. Redeker, Friedrich Schleiermacher. Leben und Werk (1768 bis 1834), Berlin, 1968.
- Dialektik, hrg. von J. Halpern, Berlin, 1903.
 Friedrich Schleiermachers Dialektik, hrg. von R. Odebrecht, (Leipzig, 1942), Darmstadt, 1976 (Nachdruck).
 Kurze Darstellung des theologischen Studiums zum Behuf einleitender Vorlesungen, Kritische Ausgabe hrg. von H. Scholz.
 呂維格、神學綱領、終大版、1766。 呂維格、神學綱領、終大版、1766。
- Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt von Friedrich Schleiermacher, 7. Auflage, auf Grund der 2. Auflage neu hrg. von M. Redeker, 2. Bde., Berlin, 1960.
 今井繁、キリスト教信仰(論)、原七キリスト教神學綱領、1766。 白水社、1766。
- ニホトヤヒニトマクニモ、神學綱領、東京、1966。
- W. Dilthey, Leben Schleiermachers. Auf Grund des Textes der 1. Auflage von 1870 und der Zusätze auf dem Nachlaß hrg. von M. Redeker, Bd. 1, 1. und 2. Halbband, Berlin/Göttingen, 1970³; Bd. 2, 1. und 2. Halbband, Berlin/Göttingen, 1966².
 G. Wehrung, Die Dialektik Schleiermachers, Tübingen, 1920.
 G. Holstein, Die Staatsphilosophie Schleiermachers, (1920),
- F. Kaulbach, Schleiermachers Idee der Dialektik, NZSysth 10 (1968), S. 225—260.
 S. Keil, Die christliche Sittenlehre Friedrich Schliermachers, NZSysth 10 (1968), S. 310—342; Zum Neuanstz der theologischen Ethik bei Friedrich Schleiermacher, ZEE 13 (1969), S. 40—52.
 T. Rendtorff, Kirche und Theologie. Die systematische Funktion des Kirchenbegriffs in der neueren Theologie, Gütersloh, 1966.
 Y. Spiegel, Theologie der bürgerlichen Gesellschaft. Sozialphilosophie und Glaubenslehre bei Friedrich Schleiermacher, München, 1968.
 H.-G. Gadamer, Wahrheit und Methode, Tübingen, 1960; Das Problem der Sprache in Schleiermachers Hermeneutik, ZThK 65 (1968), S. 445—458.
 H. J. Rothert, Die Dialektik Friedrich Schleiermachers. Überlegungen zn einem noch immer wartenden Buch, ZThK 67 (1970), S. 183—214.
 R. Strunk, Politische Ekklesiologie im Zeitalter der Revolution, München/Mainz, 1971.
 E. H. U. Quapp, Christus im Leben Schleiermachers. Vom Herrnhuter zum Spinozisten, Göttingen, 1972.

- G. Ebeling, Frömmigkeit und Bildung, (1970), in: Wort und Glaube, Bd. 3, Tübingen, 1975, S. 60—95.
- M. Cordes, Der Brief Schleiermachers an Jacobi. Ein Beitrag zu seiner Entstehung und Überlieferung, ZThK 68 (1971), S. 195—212.
- F. Wagner, Schleiermachers Dialektik. Eine kritische Interpretation, Gütersloh, 1974.
- D. Schellong, Bürgertum und christliche Religion. Anpassungsprobleme der Theologie seit Schleiermacher, München, 1975.
- H. Peiter, Theologische Ideologiekritik. Die praktischen Konsequenzen der Rechtfertigungslehre bei Schleiermacher, Göttingen, 1977; »Sittet« bei Schleiermacher. Gegen die Verweckselung der theologischen Ethik mit der kirchlichen Statistik, ZThK 72 (1975), S. 398—426.
- V. Weymann, Glaube als Lebensvollzug und der Lebensbezug des Denkens. Eine Untersuchung zur Glaubenslehre Friedrich Schleiermachers, Göttingen, 1977.
- H. Falke, Theologie und Philosophie der Evolution. Grundaspekte der Gesellschaftslehre F. Schleiermachers, Zürich, 1977.

鼎談

神学部の歩みから

(発言順)

小林 信雄

城崎 進

山内 一郎

小林 学院創立100周年を記念して『神学研究』は特別号を刊行し、とくに『神学部史』編纂プロジェクトの一環として「年表」を編む作業をスタッフ全員でやったわけですが、この機会にこれまでの歩みをふり返り、今後の課題を探る話し合いをしておきたいと思うのです。本格的な討議は他の先生方にも加わって頂き、十分な準備をした上でやる必要がありますが、今日は予備的な一つのステップとして、かなり自由に語り合いたいと思います。

城崎 どういう内容に重点をおくか、あるいは話の進めかたについて小林先生の案があれば出して下さいませんか。

小林 そうですね。まずそれほど厳密ではなくても、一応の

鼎談—神学部の歩みから

時代区分をおさえる。そして九十年の歴史を通してうかがえる関西学院の神学部の性格とか特色、あるいはスタッフや卒業生の群像などについても話題はありますね。

山内 神学部の歴史と言っても、学校の内と外あるいはどういう立場に立つかで見方がちがってくると思いますが、いくつか素材を掘り出せばそれなりに意味があるのではないですか。

城崎 神学部の場合は、やはり卒業生の人たちが自分の母校について強い関心を抱かれていますから、『神学部史』についても、意見を徴すれば議論百出でしょうね。

小林 非常に微妙な問題もありますから「部史」の叙述はよほど慎重を要しますよ。

△創業の私塾時代▽

城崎 まず一応の時代区分は可能ですね。

小林 そうです。数年前に小林栄先生ほか何人かのスタッフで原野駿雄先生から、いろいろお話しをきいた折にも言われていましたが、明治四十五年に学制の改革があり、私立関西学院神学校が神学部に改称され、やっと学校らしくなる。それまでは少人数でほんとうに細々とやっていたいわば私塾時代で、これを第一期と呼んでよいと思う。第二期は、やはり西部神学校に合体した昭和十八年まで、そしてあとは戦後の再開から現在までが第三期ですね。